



災害が起こると、これまで当たり前だった生活が一変してしまいます。

災害を経験した中学生たちの体験談を読んで、災害の恐ろしさ、辛さ、また今自分たちにできることを考えてみましょう。

東日本大震災を経験した生徒の作文

握り拳ひとつ分の命

一握りの拳。この小さな拳の、命の重みを、私たちはどれほど理解しているでしょうか。

もしも、父がいなくなるとわかっていたら…。大切な思いを伝えたのに。引き留めることができたのに。できることなら戻りたい…。

私の父は、市役所に勤めていました。あの日、父は地震の後、第一避難所で避難誘導をしていたと聞きました。来る日も来る日も父の帰りを待ち続けた避難所生活。しかし、父が帰ることはありませんでした。

最初は父の死を受け止めることができず、涙も出ませんでした。いつもそばにいた家族に、もう二度と会えないことが信じられませんでした。

家族が死ぬということを想像できますか。それは耐えがたいほど辛く悲しいものです。それと同時に、なぜ、父が死ななければならないのかという思いがわいてきました。市役所の職員として、消防団としての使命もありますが、自分の命を真っ先に考えて、すぐ避難してくれれば助かったのに…。父の死を何かにぶつけようと思いました。

そんなある夜、泣き崩れる母を祖母が慰めていました。祖母が去った後、母が言いました。「一番悲しいのはばあちゃんなんだ。自分の息子が親よりも先に死んでしまうんだから。」かけがえのない家族を失うということ、そして、残された家族の深い悲しみ。私は忘れることはないでしょう。

東日本大震災では、多くの尊い命が失われました。家族を亡くした人は、私たちの一中にもたくさんいます。人の命がどれだけ儂いものなのかを私たちは身をもって知りました。しかし、今、ニュースでは犯罪や自殺という文字が絶えず流れています。いじめ苦に、死を選んだり、人を殺してみたかったという理由で殺人を犯したりする人が後を絶ちません。命とはそんなに簡単に捨てていいものなのでしょうか。なくしていい命なんてこの世にはないはずです。

残された家族や友人の思いは。自分が気づいていれば。もっと話をしていれば、なぜなにも教えてくれなかったのか…。自分を責め、周りを恨むのだと思います。「もっと話しておきたかった。」「もっとそばにいたかった。」5年経とうとする今も、私が忘れることがなかったように、生涯思い続けるはずです。

もっと生きていたかったと思いながら死んでいった人たちがたくさんいるのに、自ら死を選んだり、人の命を奪ったりすることがどんなに残酷か。

この握り拳ひとつ分しかない大切な命を、散らしていく世の中であってはいけません。この小さな命の大きな重みを受け止めて、精一杯生きることが私たちの生きる意味なのではないでしょうか。

身近な人がいなくなってから気づく、命の尊さ。みなさんも考えてください。命の儂さ、そして、命の重みを。

東日本大震災を経験した生徒の作文

父が教えてくれたこと

「良かった。一時は、覚悟した。」

父は、姉の顔を見つめ、目に涙を浮かべながら、言いました。ろうそくの中に照らされた、父の涙。それは私が初めて見た父の涙でした。

忘れもしない、東日本大震災発生2日目の出来事です。

姉は、地震発生時、陸前高田市にいました。母はすぐに、姉に電話をかけた続けましたが、全くつながらず、携帯電話の小さい画面から流れる情報は、

「陸前高田は、壊滅状態です。」

ということだけでした。私と兄は、「お姉ちゃんは、そう簡単に死なないよ。」と、必死に母を励まし続けました。しかし、私も心の中では、万が一のことを考え、ただ姉の無事を願うばかりでした。結局その日は、姉との連絡がつかないまま、不安な一夜を過ごしました。

そして、県立病院の医師である父は、姉の安否を確認できないまま翌日DMATとして、気仙沼市に派遣されました。DMATとは、大規模災害や多くの負傷者が発生した事故現場で活動する、専門的な訓練を受けた災害派遣医療チームのことです。

父は、昔住んでいた気仙沼が変わり果てた姿になっているのを見て、大変ショックを受け、テレビから流れる陸前高田市の映像を見て、「娘は、助からないかも。」と、その時覚悟したのでした。

しかし、父は、「行けることなら、陸前高田市にも行きたい。けれど、目の前にある命を助けることが自分の使命だ。それを一生懸命やっていけば、娘も助かるのではないか。」という思いで、病院に運ばれてくる患者さんの治療にあたったそうです。

父の他にも、数多くの人々が、目の前にある命を救うことが使命だと心に決めて、活動したと思います。中には父のように、自分の家族にも会えないまま、救助に向かった人もいたでしょう。

そこまでして、父たちが救おうとした命が、どれほど重いものだったのか。私は、改めて考えました。

今、私のまわりを見てみると、教室でふざけながら「死ね」と軽々しく言っているのを耳にします。また、ニュースでは、連日のように「いじめ」について報道されています。私は、報道を目にするたびに、命が軽く見られているような気がしてなりません。私たち一人一人の命は、たくさんの人に支えられ、大切にされてきた命だと思っています。そして、次の未来へと受け継がれるものだと思います。その大切な命を、軽々しく扱うことは決して、許されないことです。

私には、夢があります。それは、薬剤師になることです。被災地では、薬剤師が、専門的な知識を活かして、不足した薬の代わりになる薬を医師にアドバイスしたり、被災者に寄り添い受診を勧めたり、医師たちを支えるような活動をしたそうです。以前から、薬剤師に興味があった私は、父の話聞き、「薬剤師になりたい」と決意しました。

私は、父の教えてくれた命の尊さを胸に、夢に向かって進んでいきたいと思っています。あの日の父の涙を忘れずに。